

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 第 号
------	-------

氏 名 稲田朋晃  
論文題目 韓国人日本語学習者による日本語アクセントの知覚と産出

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学	教 授	鹿島 央
委 員	名古屋大学	教 授	玉岡 賀津雄
委 員	名古屋大学	教 授	成田 克史
委 員	名古屋大学	准教授	宇都木 昭

## 別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国語を母語とする日本語学習者が日本語の語アクセントをどのように知覚、産出するかについて、四つの実験を行いその傾向を明らかにしたものである。分析・考察は、特にソウル方言話者を中心に、慶尚道方言話者との比較を通して行っている。

以下、本論文の概要と評価について述べる。

## [本論文の概要]

本論文は、第1章「はじめに」、第2章「先行研究」、第3章「研究課題」、第4章「実験 I：ソウル方言話者と慶尚道方言話者によるアクセント核のピッチ下降の知覚」、第5章「実験 II：アクセント核のピッチ下降の知覚に分節音および語中位置が与える影響」、第6章「実験 III：ソウル方言話者によるアクセントの知覚」、第7章「実験 IV：ソウル方言話者によるアクセントの実現」、第8章「総合考察」から成る。

第1章では、日本語学習者を対象としたアクセント研究の重要性を述べている。日本語アクセントは弁別力の観点からはそれほど大きな役割をもたないが、発話の自然性、学習者のニーズ、習得の困難さなどから、学習者のアクセント能力に関する知見を蓄積し、アクセント教育への基礎資料とすることの必要性を述べている。

第2章では、ソウル方言と慶尚道方言のアクセント体系の違いを述べ、次に、日本語アクセントの知覚と産出に関する先行研究を詳細に示している。知覚面では、日本語母語話者の知覚特性、非母語話者のアクセントの聞き取り結果を述べた後で、韓国語母語話者を対象としたアクセント研究の結果をまとめている。ここでは、母方言の違いによりアクセントの知覚能力に差がある可能性、特殊モーラ末にピッチの下がり目を聞く傾向から韓国語の音節構造の影響を検討する必要性に言及している。産出面では、韓国語話者を対象とした研究の中でも、語頭子音の声の有無および音節構造と音節量がピッチ実現に影響があるとする論考を方法論上の問題点とともに取り上げ、最後に知覚と産出に関して明らかになっていることをまとめている。

第3章では、先行研究の問題点を整理し、本論文の研究課題をまとめている。知覚・産出面での一つ目の課題は、韓国語のアクセント体系が、日本語アクセントの知覚および産出にどのような影響を与えるかということ、二つ目は、韓国語が音節言語であることの影響、三つ目は、ソウル方言における分節音の種類の影響についてである。知覚課題については、これまでの方法論上の問題点を踏まえ、新たな対応についても述べている。

第4章では、母方言のアクセント体系の違いがアクセントの知覚に影響を与えるかどうかを明らかにするために、ソウル方言話者 27 名 (KS 話者)、慶尚道方言話者 26 名 (KG 話者) および日本語母語話者 15 名 (JP 話者) を対象に、合成音声を用いて AXB 同定課題を実施し、その結果について述べている。実験語は、「ナナナ」と「ナーナ」で、いずれも第1から第2モーラにかけてピッチが7段階に変化するものである。被験者一人当たりの試行回数は、140 で約 20 分の所要時間であった。分析には、聴取した合成音が7段階の7番目と判定された「反応率」と刺激提示から回答までの「反応時間」を用いている。分析の結果、「ナナナ」系列では、JP 話者と KG 話者の反応は離散性が高く、KS 話者は低いことが分か

## 別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

り、閾値に有意な差がみられた。このことから、自立モーラの連続におけるピッチの下がり目の知覚に関しては、KS 話者は範疇的に知覚していない結果となっている。一方、「ナナ」系列では、JP 話者と KG 話者の離散性は KS 話者より高い結果ではあったが、JP 話者と KG 話者の反応の閾値には有意な差がなかったため、音節構造の影響は確認されなかったとしている。離散性の高さと学習時間、学年との相関についても検討しているが、いずれも関係は低いことが示されている。

第 5 章では、語頭子音の影響と語中でのピッチ下降の影響も調べるために、語頭子音を /n/ と /t/ の 2 種類、ピッチ下降が第 1 から第 2 モーラに、また第 2 から第 3 モーラにかけて 7 段階に遷移する 2 種類の合成音を用い、実験 I と同一の被験者群を対象に実験を行っている。実験方法は、被験者が合成音を聴取した後で同じ音を繰り返し生成する反復課題である。この課題により、被験者の音韻知識が生成に反映され、その話者の知識が範疇的であるかどうかを調べられるとしている。日本語母語話者による聴覚的判定結果の分析から、語頭子音の違いはアクセントの知覚には影響しないことが分かったが、語中でのピッチ下降は、下降が第 1 から第 2 モーラにかけて遷移する自立モーラ刺激音については、実験 I と同様に、JP 話者と KG 話者に範疇的な知覚傾向があった。第 2 から第 3 モーラに遷移する自立モーラ刺激音の場合は、KG 話者の離散性は JP 話者に比べて低く、KG 話者にとり語末のピッチ下降の知覚が難しいことが示唆されている。KS 話者については、いずれの反復音声にも離散性は確認されなかった。本章では、上記の聴覚印象による分析の他に、反復音声とモデル音声のピッチの下降部分と語頭で異なるか、基本周波数 ( $F_0$ ) による音響分析も行っている。分析の結果、ピッチ下降部分については聴覚的な分析結果と同様であったが、第 1 から第 2 モーラにかけて遷移する自立モーラ反復音声では、すべての被験者群の反応が離散的であった。このことから、KS 話者の知覚には語頭の  $F_0$  が関与していることを述べている。さらに本章では、個人間の差を明らかにするためにクラスター分析を行い 4 つの群を抽出し、KS 話者の半数が JP 話者、KG 話者とは異なる反応パターンをもつことを明らかにしている。

第 6 章では、KS 話者を対象に、第 4 章、第 5 章で明らかにならなかったアクセント核の有無の知覚と語頭のピッチ上昇の知覚への影響を、「ナナナ」を資料語として、ピッチの下降開始時点が 16 段階に変化する「高起系列」の合成音と第 2 モーラからピッチ下降を 11 段階に変化させた「低起系列」の合成音を用いて分析している。被験者は、ソウル市内の学部生 24 名である。実験方法は、第 5 章と同じく「反復課題」である。分析は、日本語母語話者が反復音声を聞き、下がり目の有無と位置を判定している。類似した反応パターンをもつ被験者を抽出するためにクラスター分析を行った結果、KS 話者は①「1 型と 0 型の対立で知覚」②「2 型と 0 型の対立で知覚」③「1 型、2 型、0 型の対立で知覚」する 3 つのタイプに分類でき、アクセント核の有無の知覚は位置の知覚よりも容易であることを述べている。

第 7 章では、KS 話者の産出面での特徴を、モーラ構造、語頭子音の声の有無、および調音点の違いを考慮した 3、4 モーラ語 74 語の読み上げ実験で分析している。被験者は、関

## 別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

東の大学に通う KS 話者 9 名である。被験者には、アクセントの知識を問う「知識調査」と調査語の親密度を問う「親密度調査」も行っている。分析の結果、KS 話者のピッチ実現には、第 2 モーラにピッチの下がり目をおく傾向、長母音末に下がり目をおく傾向、語頭子音が無声音の語は第 1 モーラに、有声音の語は下がり目のない音調で発音される傾向が示されている。

第 8 章では、3 つの研究課題それぞれについて、知覚面、生成面で明らかになったことをまとめている。最後に、本論文の意義と残された課題を述べている。

## [本論文の評価]

本研究は、韓国語を母語とする日本語学習者が語アクセントをどのように知覚・産出するかを KS 話者を中心に、KG 話者との比較を通して多角的に分析していること、知覚・産出課題を解明する方法論についてもしっかりした議論がなされていること、3 つの研究課題について新しい知見を得ている点で価値のある論文であるとの評価を得た。さらにクラスター分析により KS 話者のアクセント習得過程の違いについても明らかにしている点で高く評価される。審査では、実験方法、分析方法、分析内容などに関していくつかの質問、コメントがあった。

実験方法ではまず、知覚課題に無意味語を用いていることの妥当性、キャリア文を使ったことによる試行時間の長さが結果に影響を与えた可能性について、反復課題については、使用した理由、単に知覚を試す課題かどうか、合成音声の  $F_0$  遷移曲線が語頭子音により異なること、反復課題により L2 話者の音韻知識は抽出できるのかという質問があった。

分析方法については、離散性の検討に AXB 課題での反応時間を用いたことについて、反復課題で音響分析を行っていることは興味深い、統計処理の基になったデータの提示など丁寧な論の進め方が必要なことについても指摘があった。

分析内容では、先行研究でも曖昧なままであった KG 話者と KS 話者の異なる母方言アクセント体系が日本語アクセントの知覚面に影響を及ぼすことを明らかにした点は評価できるが、生成面では KS 話者のみを対象としているため、今後、KG 話者の慶尚南道、慶尚北道を含めた調査が期待されるとの意見も出された。音節構造に関する結果では、先行研究の結果とも一致するが、一般的には第 2 モーラに下がり目をおく傾向と母語の重音節でのピッチの下降についても検討する必要があること、第 5 章での語頭子音の影響に関する結果にもモデル音声の影響がある可能性が指摘された。

しかしながら全体的には、韓国人学習者、特に KS 話者の日本語アクセントの知覚・産出に影響する要因について明らかにしたことで、アクセント教育、習得研究の進展に大いに寄与できる結果となっている。今後の課題として、慶尚道話者に対する産出実験の必要性を挙げているが、KS 話者との比較により、さらなる知見の蓄積が期待できる。

以上のように本論文は、韓国語話者の日本語アクセントの知覚・産出について、新しい知見を示した価値のある研究として高く評価される。

以上の結果から、審査員は全員一致して本論文が博士學位論文として十分にその水準に達していると判断した。